

◆七月二十八日の大雨により、最上川の流域各地で大きな被害があった。実家のある河北町谷地でも堤防の決壊は免れたものの、川近くの集落では数十軒で床下や床上浸水があった。空き家になっている実家は大丈夫だった。数日すると被害の大きさがわかってくる。畑が全滅とか、サクランボの木が倒れた等々。ずっと下流の大石田町では川が決壊した。最上川流域の大きな被害は五十年ぶりだとか。人的な被害がなかったことは幸いだった。山形県では新型コロナに加えて、水害があり、八月に入ると三十五度を超える猛暑日があるという過酷な夏だった。県民には「山形は災害が少ない」という、妙な思い込みがあった。しかし、まじないほどにも当てにはならなかった。これからは気を引き締めていくしかないだろう。

◆次は百号。休んでいる人にも、次回はぜひ作品を出してほしいと考えている。

◆外山滋比古先生がお亡くなりになった。享年九十六。わたしたちは二〇〇四年から始まった外山滋比古先生を囲むエッセイ教室「清紫会」でずいぶんと親しくさせていただいた。はじまりは著者と編集者との関係からである。長年お付き合いのあった著者としての外山先生と編集者・布宮みつこ（「展景」の元主宰者、故人。慈子の叔母）は、わりに何でも話せる間柄になっていた。五歳年長の先生を尊敬しながら、親しみを感じていたようだ。みつこは短歌のほか、友人と交互にエッセイを書いて冊子にまとめたりして

いた。あるとき先生にエッセイについて相談したら、「歌人や俳人は文章が下手だから、勉強しよう」となったのだ。「清紫会」という名前も先生が付けてくださったものである。先生を口説いて先鞭をつけたのはみつこだったが、月に一回開く会の運営すべてを任されたのは松井淑子さんだ。二〇〇五年に布宮みつこが急逝してからも、会をスムーズに開いてくれたのは松井さんのおかげである。

十人に満たない参加者だったが、先生はエッセイを読んでそれぞれ評をしてくださった。「とにかく書き出してみる。それを数日とか時間をおいて眺めてみること」「おしゃべりする場もたいせつ」。会が終わったあとは毎回、食事を一緒にした。博覧強記というのは外山先生のような人のことだろう。気さくな方でもあった。話題が豊富でもしろうく、本当にぜいたくな場であった。さらに引き際は見事だった。先生が八十五歳になったころだろうか、「自分はこれで終わりにするが、会はみんなで続けていってください」「あとになってみれば、あのとき区切りをつけてよかったと思うはずです」と言われた。寂しくもあったが、受け入れるしかない。わたし自身は仕事で毎月出席とはいかず熱心な生徒とはいえなかったが、なんとかやり繰りして出ようとしていた。いま考えれば、清紫会で先生と過ごさせていただいたのは珠玉のような時間。それを胸に刻んで、これからも怯むことなく書いていこうと思う。

清紫会で教えてくださった外山先生に改めて感謝申し上げます。ご冥福をお祈りいたします。

（布宮慈子）

# muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊展景 99号

二〇二〇年九月二十五日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一―一七―二〇一

[info@muninokai.com](mailto:info@muninokai.com)